

【学力向上フロンティアスクール中間報告書】

都道府県名	山形県
-------	-----

I 学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	白鷹町立東中学校					
学 年	1 年	2 年	3 年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	2	11	23
生徒数	109	91	113	2	315	

II 研究の概要

1. 研究主題

『個を生かす授業の創造』

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

- ・3年生数学科
生徒の理解度の差が広がっている状況に対応するため
- ・2年生数学科
生徒の理解度の差が広がっている状況に対応するため
- ・2年生英語科
生徒の理解度の差が広がっている状況に対応するため
- ・全学年全教科
個に応じた指導の工夫や評価を生かした指導の改善を進めるため

(2) 年次ごとの計画

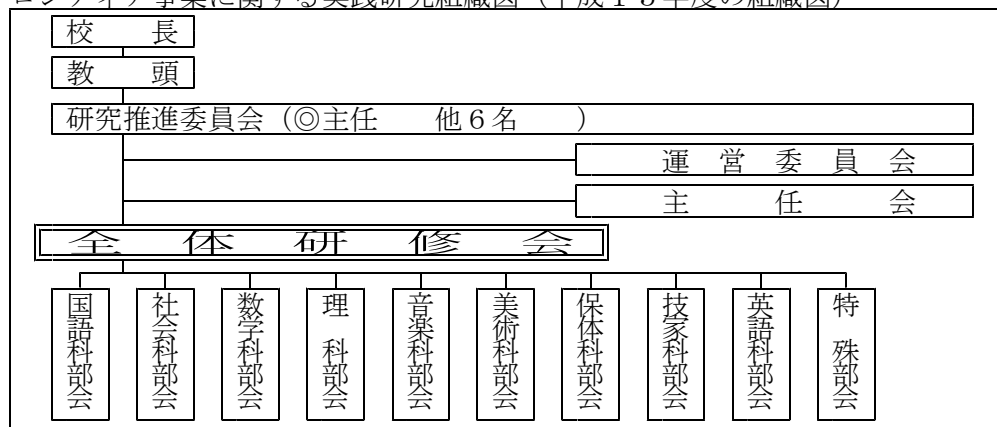
平成14年度	○テーマ 『個を生かす授業の創造』 ～生徒同士の関わりを大切にしながら、基礎・基本を定着させる指導の工夫～ ○仮説 ① 生徒一人一人の実態に即し、発展的学習・補充的学習などの個に応じた指導のための教材・指導法を工夫すれば、意欲的に学習が展開されるとともに、基礎・基本を定着させることができるのではないか。 ② 生徒同士が関わり合い、自分の考えを確かめたり、修正したり、広げたりする場面を設定していけば、個が生かされ、意欲的に学習が展開されるのではないか。 ③ 目標に対する評価活動を取り入れ、その結果から個に応じた学習を展開していけば、基礎・基本を定着させることができるのではないか。 ○研究の内容・方法 ・標準学力検査の実施と分析 ・各教科における観点別評価規準表の作成 ・「学力向上フロンティアスクール」実践研究の3カ年にわたる研究計画の作成と研究体制の確立 ・主題追求のための授業研究の実践 ・主題追求のための日常の授業実践 ア 1時間毎または数時間の小単元毎に、目標の到達度を把握できるような評価活動を工夫して行い、発展学習・補充学習等、個別学習への展開を図る。 イ 自力で課題解決させる場と、生徒同士を関わらせる場を設定し、それぞれの場で学習プリント・手引き・助言等、個が生きるような支援を工夫する。 ウ 数学科と英語科においては、次のような指導方法・指導体制の工夫を行う。 ＜数学科＞ 第2学年3クラスについては毎時間TT方式の授業を行い、第3学年3クラスについては毎時間コース制学習（習熟度別学習）の授業を行う。 ＜英語科＞ 第3学年3クラスについては毎時間TT方式の授業を行う。
--------	--

平成 15 年 度	○テーマ 『個を生かす授業の創造』 ～評価活動を生かし基礎・基本を定着させる指導の工夫～ ○仮説 ※文言を吟味し、表記の一部を修正した。また、教材の工夫と指導の工夫を分けて記述し、仮説を3つにした。 ① 目標に対する評価活動を取り入れ、その結果から個に応じた学習を展開していけば、基礎・基本の定着さらには発展的な思考力・表現力お育成が図れるのではないか。【日常の授業、単元テストとその後の補充学習・発展学習】 ② 生徒一人一人の実態に即し、個に応じた教材を工夫すれば、意欲的に学習が展開されるとともに、基礎・基本の定着さらには発展的な思考力・表現力の育成が図れるのではないか。【日常の授業、全校テスト】 ③ 生徒一人一人の実態に即し、個に応じた指導を工夫すれば、意欲的に学習が展開されるとともに、基礎・基本の定着さらには発展的な思考力・表現力の育成が図れるのではないか。【日常の授業(特に数学科のコース制授業、英語科のTT授業)、選択授業】 ○研究の内容・方法 ・ 標準学力検査の実施と分析 ・ 主題追求のための日常の授業と授業研究の実践 ※視点をきめ細かく表記し、一部加筆修正した。 ①-a 学習指導案の中に1教時毎の評価基準と評価方法を明記した指導計画を記載し、単元全体の中で計画的に個に応じた学習への展開を図る。 ①-b 1時間毎または数時間の小単元毎に、目標の到達度を把握できるような評価活動(小テスト・小単元テストや生徒自身による自己評価等)を工夫して行い、教師や生徒自身が現在身についている力と今後の課題が具体的にわかるようにし、それをもとに個に応じた学習への展開を図る。 ①-c 単元末に単元テストを行い、その結果からわかった生徒の実態に応じて補充的な学習・発展的な学習・内容を深化させる学習等、個に応じた学習への展開を図る。 ②-a 生徒が自分の興味関心に応じて選択できるような教材を工夫する。 ②-b 自力で課題解決させる場と、生徒同士を関わらせる場を設定し、それぞれの場で学習プリント・手引き等、個が生きるような教材を工夫する。 ②-c 全校テストは次のような形式で実施し、個に応じた教材の開発を進める。 ○ テストとその練習学習は、年間教育計画に位置づけられた特設の時間の中で実施する。国数社理英5教科のテストを、年間3回(1学期2教科、2学期2教科、3学期1教科)に分けてテストを実施する。 ○ 各教科において、特級(150問)・上級(125問)・中級(100問)・初級(50問)という4階級(とテスト範囲問題数)を設定し、生徒が自分の力にあった階級を選択し、練習・テスト受験するものとする。 ③-a どの教科においても、生徒指導の3つの機能を具体化した視点を設定し、指導の改善を図る。 ③-b 数学科と英語科においては、次のような指導方法・指導体制の工夫を行う。 ＜数学科＞ 第2学年3クラス、第3学年3クラスについては毎時間コース制(習熟度別)の授業を行う。 ＜英語科＞ 第2学年3クラスについては毎時間TT方式の授業を行う。 ③-c 3学年で共通して行う選択授業(本校では選択Iと言う)においては、次のような指導方法、指導体制の工夫を行う。 ○ 授業は年間教育計画に位置づけられた特設の時間「東中タイム」(定期テスト前の年間5期)に行う。 ○ 生徒は年5回とも、国数社理英の5教科から2教科を選択して履修する。選択Iの各教科は、可能な限り同教科内で発展コース・補充コースの2コースを開設したり、TT指導を行い、個に応じた指導の工夫を図る。
--------------------	--

平成 16 年 度	○テーマ 『個が生きる授業の創造』 ～基礎・基本の定着や発展的な力の育成に結びつく評価と指導の工夫～ ○仮説 次のような指導の工夫を行っていけば、意欲的に学習が展開されるとともに、基礎・基本の定着さらには発展的な思考力・表現力の育成が図れるのではないかと。 ① 生徒一人一人の実態に即し、個に応じた教材を開発・工夫する。 ② 評価を行い、その結果をもとにして個に応じた指導を行う。 ③ 少人数指導やT T授業等の授業形態で、個に応じた指導をきめ細かに行う。【数学科のコース制授業、英語科の少人数授業・T T授業】 ○研究の内容・方法 ・ 標準学力検査・各教科の単元テストの実施と結果分析 ・ 各種アンケート調査による研究の成果と課題の分析 ・ 主題追求のための授業実践 【授業における研究の視点】 ①-a 生徒個々の力や興味関心に応じて個別に課題を設定できるようにしたり、活用する教材教具を選択できるようにする。 ①-b 課題を自力解決するための補助教材を開発・工夫する。 ①-c 小単元テスト・単元テスト後の補充教材・発展教材を作成・活用する。 ②-a 学習指導案の中に1教時毎の評価規準と評価方法を明記した指導計画を記載し、単元全体の中で計画的に個に応じた学習への展開を図る。 ②-b 1時間毎の形成的な評価や、小単元・単元毎に目標の到達度を把握できるような評価を行い、それをもとに補充・発展・深化等の個に応じた学習への展開を図る。 ③-a 数学科と英語科においては、次のような指導方法・指導体制の工夫を行う。 ＜数学科＞ 第2学年3クラス、第3学年3クラスについては毎時間コース制（習熟度別）の授業を行う。 ＜英語科＞ 第3学年3クラスについては毎時間少人数指導の授業を行う。 第2学年3クラスについては毎時間T T授業を行う。
--------------------	--

(3) 研究推進体制

フロンティア事業に関する実践研究組織図（平成15年度の組織図）



Ⅲ 平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

- 各教科において、生徒個々の考えを記入する学習プリントやつまづき対策用学習カード等により、個に応じた指導のための教材の工夫を行った。その結果、そのプリント類を活用しながら自力解決が図れるようになったり、教師からの支援を待っている間に自分なりに課題解決をはかろうとする意欲の向上がみられた。
- 各教科で自己評価カードを活用し、その結果をもとに補充指導を行った。特に数学科では、自己評価が適切に行われる工夫として、評価規準と具体的な評価問題例を併記した自己評価カードを用いた。補充を行った内容は単元テストの内的一部分ではあったが、補充を行った内容については確実にテストの正答率が向上した。
- 2年英語科において1C2T型のTT授業を実施し、基礎的な内容が定着していない生徒への個別指導を行ったり、ドリル学習で机間指導する生徒集団を半分ずつ分担するなどし、できるだけ個に応じながら生徒の学習意欲を高めることができた。
- 2年と3年の数学科においてコース制(習熟度別)学習を実施し、A(ゆっくり)コース・B(普通進度)コースそれぞれの生徒が自分のペースにあった学習が進められた。特に2年生は基礎的な内容が定着していない生徒が各クラスに3・4名程度いたが、Aコースで学習を進めたことにより定期テストの得点を大幅に伸ばした生徒が半数程度みられた。
- コース制授業とTT授業について、生徒記入のアンケート調査を実施した。

アンケート項目	2・3年数学科コース制授業		2年英語TT授業	
	効果あり	効果なし	効果あり	効果なし
理解度が高まった	75%	25%	80%	20%
話を聞く集中度が高まった	86%	14%	83%	17%
自力解決できるようになった	66%	34%	64%	33%
教科が好きになった	60%	40%	50%	50%
授業を楽しみにしている	85%	15%	60%	40%

この結果をみると、コース制授業とTT授業の指導形態は、ここにのせた項目等に関してプラス面の効果が表れていると判断できる。

2. 今後の課題

- 生徒に自己評価を行わせ、その結果を補充学習に生かす実践を積み上げてきたが、全員に正確な自己評価を行わせることが難しかった。16年度は教師による評価を中心として、その後の指導を進めていきたい。
- コース制授業やTT授業についての生徒記入アンケートの結果から、進んで手を挙げたり進んで予習・復習を行う積極性にまで結びついていないということがわかった。学習の積極性にまで結びつく指導を行っていきたい。

Ⅳ. 学力把握のための学校の取組について

- 標準学力検査を年1回、3月に実施する。
- 各教科で単元テストを実施し、生徒一人一人の到達度を測定する。

Ⅴ. フロンティアスクールとしての成果の普及について

- 平成16年度11月に公開授業研究会を実施の予定
- <http://www1.shirataka.or.jp/east-jhs/frontier/> にて実践研究計画書を公開中。

◇次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- | | | |
|----------------------|---|--|
| 【新規校・継続校】 | ☐ 15年度からの新規校 | ☒ 14年度からの継続校 |
| 【学校規模】 | ☐ 3学級以下 | ☐ 4～6学級 |
| | ☐ 7～9学級 | ☒ 10～12学級 |
| | ☐ 13～15学級 | ☐ 16学級以上 |
| 【指導体制】 | ☒ 少人数指導 | ☒ T・Tによる指導 |
| | ☐ その他 | |
| 【研究教科】 | ☒ 国語 | ☒ 社会 |
| | ☒ 外国語 | ☒ 音楽 |
| | ☒ 保健体育 | ☐ その他 |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | ☒ 有 | ☐ 無 |